

内モンゴルホルチン地区における牧畜業生産習俗の変容

——半農半牧村落ダランアイル・ガチャーを事例に——

包 周 娜

BAO Zhouna

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】 ホルチンという言葉は本来モンゴル遊牧民の中の一部族であるホルチン部を指してきたが、徐々にホルチン部族が生活する地域を「ホルチン地区」と呼ぶようになった。特に中華人民共和国の成立後、興安嶺の東南麓に位置する内モンゴル自治区東部の通遼市を中心として指すようになった。

ホルチン地域は清朝時代の移民開墾を経て、農耕を中心とするようになり、モンゴル人の半農半牧村落社会が形成された。モンゴル人総人口の80%以上はこの東部地域に居住し、主に農業と「半農・半牧」生業を営んでいる。西部地域は、主に牧畜業を営み、家畜の数が多く、人口の少ない地域であり、伝統文化や価値観およびモンゴルアイデンティティーが東部地域とは異なる面も少なくない。1980年代以降、内モンゴルの生態環境、生業、文化、風俗習慣は多くの場所で変容し、草原の面積は日増しに狭くなり、モンゴル人の生業や生活にも様々な変化が見られる。

本論では、内モンゴル自治区東部ホルチン地区左翼後旗ダランアイル・ガチャーの牧畜を営む農牧民の事例を取り上げ、農耕化、近代化、市場経済化、政策転換などに向き合うプロセスでどのように対応し、彼らの牧畜業そのものの特徴や変容を考察した。まず、調査地であるホルチンモンゴル人の生活する社会背景と農牧生業の営みについて紹介した。次に、定住後牧畜業の変遷に関してダランアイル・ガチャーの牧畜民の経験から放牧方式、家畜飼料、家畜飲用水、家畜小屋の側面から過去と現在の違いを明らかにした。さらに、家畜構成とその価値の変容、家畜保護管理習俗、処理習俗について考察した。最後に、ダランアイル・ガチャーの牧畜具について考察した。

Transformation of Stock Farming Production Practices in the Horqin District of Inner Mongolia

—— Case Study of the Agropastoral Village Dalanail Gacha ——

Abstract : In the past, Horqin referred to the Horqin people, a subgroup of Mongolian nomads, but the name gradually came to represent the area inhabited by the Horqin people. In particular, after the establishment of the People's Republic of China, the area encompassing Tongliao City in the eastern part of the Inner Mongolia Autonomous Region, became collectively known as the Horqin District.

During the Qin Dynasty, the Mongolian people cultivated land in the Horqin District and began farming activities; they formed village communities based on agriculture and stock farming. Today, more than 80 percent of Mongolians live in this eastern area, mainly earning a livelihood through agriculture, or concurrently through agriculture and stock farming. On the other hand, the western part of Inner Mongolia is sparsely populated mostly by stock farmers who manage

large numbers of stock animals. There are various differences between the western and eastern regions in terms of traditional culture, values, or Mongolian identity. Since the 1980s, many parts of Inner Mongolia have undergone significant changes in the people's living environment, livelihoods, culture and customs, and the grasslands are shrinking every year with various impacts on their work and lives.

This paper focuses on Dalanail Gacha of the Horqin Left Back Banner in the eastern part of the Inner Mongolia Autonomous Region and examines how the agropastoral people there have responded to such social changes as the spread of agriculture, modernization, the rise of a market economy, and national policy shifts, while analyzing the characteristics and transformation of their stock farming practices. First it details the Horqin Mongolians' social background and their agropastoral activities. Then it considers the transformation of stock farming practices in this area since the settling of people in Dalanail Gacha by comparing past and present grazing methods, food and water given to stock animals, and their stables. The paper also introduces the composition of stock animals and methods of their protection, management and slaughtering. Lastly, it looks at the stock farming tools used by the Dalanail Gacha people.

はじめに

ホルチンという言葉は本来モンゴル遊牧民の中の一部族であるホルチン部を指してきたが、徐々にホルチン部族が生活する地域を「ホルチン地区」と呼ぶようになった。特に中華人民共和国の成立後、興安嶺の東南麓に位置する内モンゴル自治区東部の通遼市を中心として指すようになった。

ホルチン地域は清朝時代の移民開墾を経て、農耕を中心とするようになり、モンゴル人の半農半牧村落社会が形成された。モンゴル族総人口の80%以上はこの東部地域に居住し、主に農業と「半農・半牧」生業が営まれている。西部地域は、主に牧畜業を営み、家畜の数が多く、人口の少ない地域であり、伝統文化や価値観およびモンゴルアイデンティティーが東部地域とは異なる面も少なくない。1980年代以降、内モンゴルの生態環境、生業、文化、風俗習慣は多くの場所に変容し、草原の面積は日増しに狭くなり、モンゴル人が生業する現実にも様々な変化が見られる。本論は、半農半牧地区における牧畜民の物質文化と牧畜生業習俗に焦点を当てたものになる。まず、従来の内モンゴル牧畜研究はどのようなアプローチで展開してきたかを概観してみよう。

近年、内モンゴルの社会変容および環境破壊に関する研究は盛んに行われており、その中で漢人の入植と開墾と遊牧社会の変化に関する研究が注目される。色音は、内モンゴルの多くの地域において現地調査を行い、モンゴル人の遊牧からの定住化および牧畜から農耕へ生業転換した過程を明らかにした（色音 1998）。彼は社会発展論的な観点に基づき、漢人の入植および開墾がモンゴル遊牧社会の経済発展に欠かせない役割を果たしたと論じている。ボルジギン・ブレンサインは、歴史的な立場から東部内モンゴルにおける蒙地開墾と漢人入植により農耕化され、村落社会を形成し、生業として農業と牧畜が共存していることを明らかにした（ボルジギン・ブレンサイン 2003）。小長谷有紀は、内モンゴルのシリンゴル盟を事例に挙げ、定住や放牧地などの分配により牧畜民の牧畜経営は多様化していることを明らかにした（小長谷 2001）。郝亜明と包智明は、内モンゴル・ホルチン左翼後旗にて、現在の農耕モンゴル村落社会における人口問題や婚姻・家庭問題、消費構造などの実態を把握す

るとともに、現在実施されている国家政策の影響について解明した（郝亜明、包智明 2010）。児玉香菜子の研究は内モンゴル西部オルドス地域の農牧民の現代的変容について家畜類型と資源利用に着目しながら、干ばつ進行と定住化により牧畜から放牧畜産に転換、さらに環境政策により「舍飼い畜産」へと変化したことを解明した（児玉 2012：109）。

これまでの内モンゴルにおける牧畜研究を概観してみると、モンゴル牧畜民の生活様式や生業転換、環境破壊や開発資源利用などが明らかにされてきたことがわかる。中でも、内モンゴルにおける西部の牧畜民を対象にした研究が多く見られる。東部地域においては半農半牧の形成過程についての研究は多いが、ホルチン半農半牧村落における牧畜生産習俗の変容を解明した研究はほとんど見られない。

以上の研究を踏まえて、ホルチン地区半農半牧村落におけるモンゴル人がいかに牧畜を維持しているのか、社会主義的な市場経済化に直面している牧畜民の生業はいかに自然・社会環境の変化に応じて実践されているのかという問題意識を持ち、歴史政策的背景をふまえながら、ホルチン左翼後旗ダランアイル・ガチャーの牧畜を営む農牧民の事例を取り上げ、農耕化、近代化、市場経済化、政策転換などに向き合うプロセスでどのように対応し、彼らの牧畜業そのものの特徴や変容を考察することで、モンゴル牧畜研究に新たな資料と視点を提供することを試みたい。

I 調査地概要

(1) ホルチン左翼後旗

内モンゴルホルチン地域は、大興安嶺山脈の東斜面とそれに続く平原の西部に存在する。ここは乾燥地帯である中央アジアのステップにおける最も東の部分形成し、植生上は森林ステップが優勢である（吉田 2007：272）。北はフルンボイルと接し、南は河北省、遼寧省、山西省などの三省と接している。西はシリントウ、東は吉林省、黒竜江省と接する。西遼河平原とホルチン沙地はこの地域の境内に位置する。ホルチン地域は標高が低いこともあり、内モンゴル西部と比較すると気候は相対的に温暖で、地下水位も高く、降水量も豊富で、遊牧や農耕を行うのに最適な地域であると考えられる。

ホルチン左翼後旗（以下では後旗と省略）は内モンゴルの通遼市の南部に位置し（図1）、地理的には北緯 $42^{\circ}40' \sim 43^{\circ}40'$ 、東経 $121^{\circ}30' \sim 123^{\circ}30'$ にある。南部は遼寧省、東部は吉林省にそれぞれ接し、総面積 11476 平方 km、総

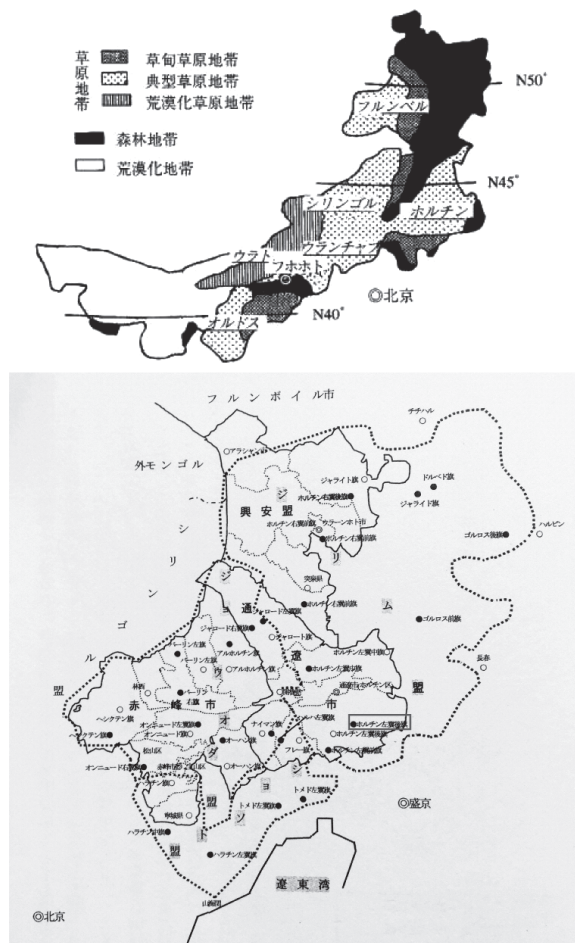


図1 ホルチン地区とホルチン左翼後旗
出典：吉田順一（2007）「近現代内モンゴル東部とその地域文化」、（部分）

人口 40 万人のうち、モンゴル人は 29 万人で、総人口の 73% を占める。後旗の年間平均気温は 5.3～5.9℃で 1 月の平均気温が -13℃、7 月の平均気温は 23℃である。無霜期間は約 154 日であり、秋霜期は 9 月末から 10 月初めまで、春霜期は 5 月上旬まで続く。年間平均降水量は 450 mm である。風が強く、1989～2007 年の統計によると、春の 3～5 月は風が一番強い（ホルチン左翼後旗誌編纂委員会 2008：74-76）。

(2) 農業移民の流入と開墾

後旗は最も早くから農耕社会へ転換してきた地域の一つである。1791 年、山東、河北、河南から流入してきた移民たちはこの旗の東南境内で秘かに開墾を始めた。また 1802 年から 1806 年までの間に 3900 戸 1 万人余りの移民が流入した（郝亜明、包智明 2010：55）。1802 年から 1899 年まで清朝は「借地養民」政策を実施し、漢人をモンゴル旗に移住させ、牧草地を開墾させた（ホルチン左翼後旗誌編纂委員会 1993）。そして、大量の漢人がこの地域に流入し、放牧地が開墾され、漢人がモンゴル人と混住するようになった。開墾面積は全旗の総面積の 70% に上がり、さらに、1927 年大通鉄道が完成し開通したことと、1935 年に日本満州国がジリガランを通る街道を建設したことによって、漢人がさらに流入してきた（ホルチン左翼後旗誌編纂委員会 1993）。

1949 年の中華人民共和国成立以来、人民公社制・生産責任制・土地請負制といった土地制度などの大きな変革を経験してきた。そのような変革は、内モンゴル地域の生産手段とする農牧業の様式に甚大な影響を与えた。とくに、改革開放経済政策の下で 1981 年から導入された生産責任制は、人民公社時代の集团的・計画的生産体制を、個々の農牧民を生産の基本単位に転換することを通してその生産意欲を刺激し、農牧業の生産性を著しく増大させた。さらに、1996 年から始まった土地請負制は、農牧民の土地保有を 30 年間固定することによって、農牧地利用形態の変化をもたらすとともに、農牧地の基盤整備その他への資本投下を促し、農牧業高度化への展開を開いた（澤田 2004：611）。

現在ホルチン左翼後旗は、北方の典型的農牧交錯地帯に属し、農牧林業が結びついた経済類型区に分類される。

(3) ダランアイル・ガチャー

⁽¹⁾
ダランアイル・ガチャーは通遼市ホルチン左翼後旗に所属している。旗政府所在地のガンジガ鎮から東北へ 70 キロ離れたところにアゴラ・ソム（今はアゴラ鎮）が位置し、調査対象地はアゴラ・ソムに属する末端行政単位である。ホルチン沙地に入っており、半農半牧地域で、農耕を専業としている農家はあるが、牧畜を専業としている牧畜民はもはや存在しない。

⁽²⁾
総世帯数 254 戸、総人口 944 人、99% 以上がモンゴル人である。土地総面積は 4.4 万ムー、そのうち耕地面積は約 1.4 万ムー、森林地面積は 0.6 万ムー、放牧地の面積は 2 万ムー、採草地の面積は約 0.4 万ムーである。家畜頭数に関しては、2018 年の統計によると羊 662 匹、山羊 321 匹、牛 2017 頭、馬 65 頭である（ガチャー委員会提供データ）。

当ガチャーの農牧業年間サイクルは以下の表 1 に示した通りである。

① 1 月～4 月中旬：農作物の出荷、畑の片付け、施肥、種子などを準備する。1 月～2 月までは休

みが多く、3月～4月中旬に、施肥、種子等を準備する。

② 4月中旬～9月：農作物の栽培期（耕作、播種、成育）である。

4月中旬から播種が始まり、7月までは除草と追肥が必要な成育期間である。7月～8月中旬までは防虫、害虫農薬散布の時期。8月中旬～9月までは農閑期であり、農作物保管場所を確保し、収穫するための機具を整備しながら干し草を刈り、冬期家畜飼料として保管する。

③ 10月～12月：農作物の収穫、農作物の茎の刈り取りに分けられ、農作物の一部を出荷する。10月から収穫が始まり、12月までは農作物の収穫、農作物の茎を牧草・燃料用に刈り取り、また農作物を出荷する。

④ 家畜の飼育は出産時期（10月中旬～4月中旬）が一番の繁忙期である。家畜の出産時期は家畜によって異なり、牛の出産時期は3月～4月中旬まで、羊、山羊の出産時期は10月～4月までである。3月～4月中旬までは出産、予防接種をする。4月中旬～6月中旬までは家畜の毛を刈り、薬剤で洗う。6月中旬～9月中旬までは家畜の販売時期であり、家畜の販売で得たお金で優秀種を入手する。

現在、飼っている家畜の頭数が少ないため、専業農家のモンゴル人が増えつつあり、農業技術と農薬の普及によって、農業を行う期間は三カ月しかない。表1に示したように、3月から11月の間に生業活動が集中しているが、そのうち5月、10月、11月の三カ月しか実際に働く必要がない。12月から2月にかけて農閑期となる。その結果、若者たちが都市へ出稼ぎに行くとか、ガチャーで商店を経営するとか、いろいろな方法で空いた時間を利用することになる。

牧畜の生産方式の現状については全調査対象から聞き取りを行ったが、過去の生産方式、またそれがどのように変化してきたかについては、60歳以上の農牧民から話を聞くことにした。

表1 ダランアイル・ガチャー農牧業年間サイクル

季節	月	農業	牧畜業
春	3	畑の片付け、施肥、種子などの準備	家畜出産（牛）、予防接種
	4		
	5	播種、除草、追肥	家畜の毛を刈り、薬剤で洗う
6			
夏	7	防虫、防虫、害虫農薬散布	家畜の売買
	8		
		干し草を刈り取り	
秋	9	農作物の収穫	予防接種
	10		
	11		
冬	12	農作物の出荷	羊、山羊などの家畜出産
	1	農作物の出荷	
	2	休み	

出典：2017年2月の聞き取り調査より

II 牧畜業における過去と現在の違い

(1) 放牧方式の変遷過程

モンゴル人の定住化時期について、暁剛、池上彰英によると、ホルチン左翼後旗西部（現在のホルチン左翼後旗境内）では、清代に旗東部からの放牧地を求めたモンゴル人の流入、および開墾目的での漢人の流入（もちろん東部ほど激しいものではない）が進んだ。その結果、西部でも放牧地の減少が起こり、やがて旗内のモンゴル人の定住化（遊牧から定住放牧への転換）が進んだと考えられる（暁剛、池上 2015：77）。

清末期から中華民国期にかけてのモンゴル人の定住化に伴い、遊牧による牧畜業は定住放牧に転換した。

遊牧による牧畜業とは、放牧しながら移動することを基本とするもので、自然災害から逃れるモンゴル人の唯一の方法でもあった。移動時期は、天然の牧草が春に緑色になり、夏に成長し、秋に実り、冬に黄色くなるという自然の法則に従い、水を求めながら年に四回、すなわち季節ごとに移動する。土地そのものを放牧地として使い、牧草は収穫しなかった。

定住放牧とは定住を前提に行われる牧畜業を指し、基本的に毎日家畜を放牧地に放牧し、夜は畜舎に戻し牧草を食べさせる飼育方式である。定住放牧の特徴は、草原を採草地（草の質が良い）と放牧地に分けることである。採草地では放牧を行わず牧草を採り、放牧地にのみ放牧をする。

この方式は遊牧ほど放牧地を必要としないが（そもそも放牧地不足により遊牧が不可能になったことが前提である）、牧草を採るための労働力が必要とされる。このような、遊牧による牧畜業の定住放牧への転換は、粗放的牧畜業から労働集約的（畜産業ほどではないが）牧畜業への転換ともいえる。

当ガチャーには中華人民共和国成立前にすでに定住していた。GL 氏の話によると、「従来のような遊牧は行われていなかったが、家畜の多い牧畜民は大体 6 月から 10 月にかけて「オトル」を利用していた」という。「オトル」式放牧とは、いわば遊牧と定住の中間的放牧方式である。草が生えている季節に、より良質の水草を求め、寒い冬を乗り越えられるだけの力を家畜につけさせ、冬は草が食べられていない、暖かい場所に家畜を集中させて生活するという点ではむしろ遊牧に近い。ただ従来の遊牧との違いは、通常は年に一回だけ移動し、しかもほとんどが同じ場所に移動するという点である。それを可能にしたのは東部地域の立地条件である。その中で、牧草の性質の良さはより重要な要素であり、標高が高く、降水量の少ない西部地域やモンゴル国のように頻繁に移動する必要はなかった。ゆえに生活面では定住し、生産面では必要に応じて移動放牧を維持するという方式をとってきたのであり、そこには経済的合理性が見出される。

しかし、「オトル」式放牧を行っていなかった事例は多い。家畜が少なく、移動放牧を行う必要がなかったためだという。またそれだけの家畜では生活の維持が困難で、農耕や賃金労働に従事しなければならなかった事例では、HB 氏（世帯主）は現在の東ウジウムチンまで塩を運びに行き賃金収入を得ていた。MT 氏は、モンゴル語でナマクタリヤ（モンゴル伝統式農業、漢語では漫撒子と称される耕作）を行っていた。放牧地から離れたところで、蕎麦か黍の種を播き、すきを入れ、収穫までほとんど手を入れないという粗放的農法である。各農家は、放牧地から少し離れたところに、そして

1カ所に集中して耕作していた。面積は1農家当たり2~10ムーという小規模であった。家畜も農作物も自家食用するための生産であった。

人民公社制期にGL氏はガチャーの北部に位置する沙漠の周辺に住宅を構え、春から夏にかけて水の多い草原で家畜を放牧し、新鮮な草を食ませて肉太りさせる。8月に入ってから沙漠のオアシス地域において「オトル」式放牧を行い、栄養価の高い草を食ませて脂肪太りさせる。冬は家畜を連れて住宅地へ戻ってくるが、11月から12月にかけて草刈りが終わった採草地において放牧し、1月から4月の間に再び暖かい沙漠の中で放牧するという経営形態であったという。一部の牧畜民は小家畜を沙漠において、一部の牧畜民は東北に位置する採草地において放牧していた。年に1回しか移動しないが、放牧地を季節ごとに合理的に利用していたことが分かる。採草地が3カ所あって、家畜に濃厚飼料を与えなくても越冬できていた。この時期に国家の「自分の米を自分で作る」というスローガンの下で農牧結合経営が進められ、GL氏の話によると少なくとも1000ムーの草原が開墾されたという。

80年代以降は家畜、耕地の分配が相次いで行われ、個別農牧家による放牧、耕作が行われるようになった。また、人口の自然増加と人民公社制期に農耕技術者として移民してきた農家の定着によって、「オトル」式放牧はもはや不可能となった。沙漠、放牧地は依然として共同利用であったため、ソムセンターに住む公務員、商人たちは当ガチャーの沙漠で柴刈りをし、牧畜民から家畜を買って、それを牧畜民に委託するようになった。90年代に入ると、国が環境問題を重視し始め、やがてソムの半分の面積を占める沙漠と山地での放牧は禁止された。放牧地不足を補うために採草地を放牧地に転用したという。

当ガチャーでは1988年に放牧地の請負が始まった。当時放牧地の請負は牧畜民の意志で行われ、場所と面積は先着優先となっていた。請け負った牧畜民は放牧地の使用料の支払いが義務付けられた。さらに、1996年になって、全ての放牧地が個人に分配された。最初は近隣同士5、6世帯で共同利用をし、ほかの近隣ガチャーでは4、5年で各農牧家が放牧地を鉄欄で囲んで、個人放牧地における境界を明確し、個別に利用するようになったという。しかし当ガチャーでは鉄欄で放牧地を囲まなかった。放牧地が各世帯に均等に割り当てられ、利用代償の支払いも免れ、利用期間を30年としたため、ここでは放牧地の分配として扱う。農牧家が分配された放牧地を囲い込み、牧畜経営の牧戸単位での個別利用が最終的に実現した。

この土地請負制度により放牧地などの土地の使用権が農牧家に請負され、これは所有権の転換が伴わない、あくまで土地の使用権に係る制度である。当初30年間の使用が許可されていたが、2008年の全国人民代表大会において原則70年間の長期的使用権を認めることが決定された。土地の請負は、従来、ガチャー単位で集団所有されていた土地を対象にして、当時の戸数、人口、家畜頭数に即した面積の使用権を牧畜民に付与することを基本とした。

放牧地の分配が放牧地の転用を可能にした。定住放牧は放牧を行わない畜産業へと転換しつつある。牧民の話によると放牧地の分配により放牧地がさらに耕地化されたという。

2000年以降、耕地がさらに増加した背景には、特に近年のトウモロコシの市場価格高騰と2003年の「休牧」政策の実施が考えられる。耕地が広げられ、放牧地が狭まり、牧草も悪化し、牧畜が困難となった。現在、明確な農主牧副経済に移行した。最近では「禁牧」政策で山羊、羊の放牧ができなくなり、この状況が続くと急速に純農業経済に陥ってしまう可能性がある。

(2) 家畜飼料の変化

当ガチャーの土地は、平原であり、塩分濃度が高いという特徴を持つ。またそのガチャーの周辺には天然の牧場があって、家畜を飼養するのに適した所と認められている。「文革」以前、住民たちは春から秋までここで家畜を放牧していたといわれている。しかし、「文革」以降、ガチャー内では約1500 ムーの草原が開墾されたため、ガチャーでは家畜の飼料が欠乏する危機に陥った。この問題を解決するために、ガチャー人は秋に草を刈りとして保存し、冬の飼料としていた。近隣の漢族村落では農作物の茎を蓄えて飼料の不足に対応していたが、この方法は当ガチャーでは当時普及していなかった。

90年代から放牧地が分配され、個人の放牧地を耕地に転用したことや草原の退化、砂漠化により牧場資源は急速に縮減した。したがって農作物の芯や枝などが家畜の餌として使われるようになった。

さらに2003年に国の「退耕還林」政策⁽³⁾に応じて、内モンゴルではこの政策の一環として「退牧還草」政策⁽⁴⁾が断行された。「退牧還草」は放牧を禁止することで、草地を復元することを意味し、主に「禁牧」、「休牧」、「区輪牧畜」という三つの手段が採用されている。「禁牧」とは長期間にわたる放牧の全面禁止、「休牧」とは牧草育成期における放牧禁止や必要に応じて一定期間の放牧禁止、「区輪牧畜」とは放牧地を区分したローテーション放牧を指す。

ホルチン地域その砂漠化の実態を概観すると、表2に示したように80年代末期から2000年までに流動沙丘が加速的に増加したことが分かる。

表2 ホルチン地域における全土地に対する土地被覆別面積の割合

割合 (%) 年	科目	流動・半流動沙丘 (増)	水面・森林・樹林 (減)
1961		1.8	54
1988		6.0	28.4
1994		11	27.9
2000		23	17.1

出典：中国緑色時報2008年10月16日報道より

2003年から当ガチャーでも「休牧」が実施され、牧畜民の話によると年ごとに禁牧期間は異なるという。大体4月1日から7月15日まで、あるいは4月から10月まで禁牧され、家畜の飼料の不足問題に直面していた。そこで、牧畜業を持続するために、GL氏は「当時、補助金（年1頭で10元ぐらい）をもらい、トウモロコシ、豆など農作物を植えることで飼料の不足問題を解決してい

た」と語っていた。

ガチャー人によると、2000年からトウモロコシの栽培が増えたという。その理由としては、①トウモロコシの売値が高くなったこと、②畑に井戸を作るようになったこと、③トウモロコシは他の作物より栽培しやすいこと、などが挙げられる。トウモロコシの値段および栽培面積は、2000年から10年ぐらいの期間において一気に上がったことが、図2、3から分かる。旱魃が続く年々に畑に井戸を作ることによって、トウモロコシの収穫が保障される。その他、トウモロコシの殻や枝（殻の内側の棒以外のもの）などが家畜の餌になり、旱魃による刈り草の不足状況を緩和できるようになることも、トウモロコシ栽培が拡大したことの大きな要因であろう。

GL氏は35頭の牛を飼っていて、その一日の餌やりの時間帯について以下のように話していた。

「4月から10月まで「休牧」時期に、畜舎飼育の方式で家畜を飼育するしかなかった。他の時期に

は主に、周辺の砂漠、田畑の周りに放牧する。秋冬は7:30に家畜を田畑に出すことができる。見張る必要はない。昼13:00ごろに家畜が自分で戻ってくる。飲用水を提供してからトウモロコシを加工したものと市場で買った人工飼料を混ぜて食べさせる。17:00ごろには採草地で刈った草や購入した牧草を食べさせる。春夏は「休牧」で、朝と晩は牧草の餌、昼は人工飼料で飼養する。飲用水は朝と晩と二回提供する（写真1、写真2）。2010年ごろにはすでに飼料を備蓄する倉庫を建て（写真5）、また農作物を加工する機械（写真3）を購入した。さらに都市から家畜の人工飼料を購入していた（写真4、6）。畜舎で飼養する家畜にとって、自家生産のトウモロコシとその殻は重要な餌となっている。毎年自家放牧地から草刈りをするが、連年の旱魃で草の成長が悪いという。したがって、家畜飼料については牧場の牧草から人工飼料に依存する方式に転換したといえる。

上述のように、ホルチン半農半牧地域のモンゴル人は、農耕地拡大、砂漠化や放牧地の縮小などの社会現象を経験しながら家畜の飼料として主に作物を利用するようになった。そして、「禁牧」による家畜の舎飼いは飼料の需要を大幅に増やした。そのため、作物からなる飼料の重要性が高まった。2018年に至るまで、牧畜業を営んでいる家庭は「植える、買う」方法や「買う」方法で家畜の飼料問題を解決していた。つまり、ガチャー人はほとんど農作物の茎や人工飼料を利用して牧畜業経済活動を維持している。

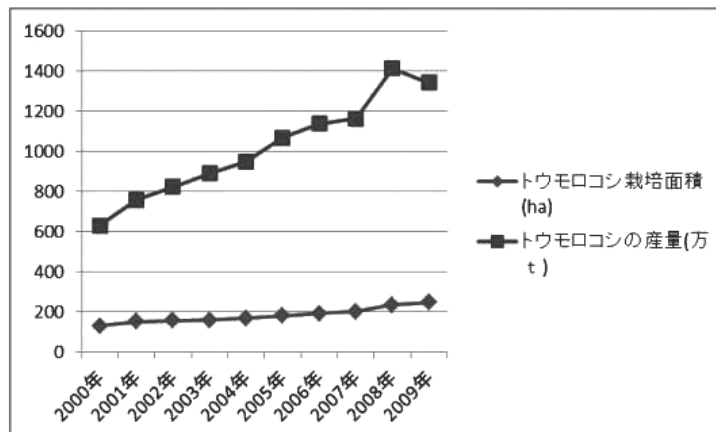


図2 内モンゴルのトウモロコシ栽培面積の変化

出典：内蒙古自治区統計局編（2005）『内モンゴル統計年鑑』より引用



図3 中国2000年以来トウモロコシ価格変化（元/kg）

出典：中国牧畜業協会（2009）より引用



写真1 畑周辺での放牧
出典：2017年 筆者撮影



写真2 畑周辺での放牧
出典：2017年 筆者撮影



写真3 トウモロコシ加工機械
出典：2017年 筆者撮影



写真4 人工飼料に加工する作業
出典：2017年 筆者撮影



写真5 牧草飼料を備蓄する倉庫
出典：2017年 筆者撮影



写真6 人工飼料の飼養
出典：2017年 筆者撮影

(3) 家畜飲用水の変化

放牧はずっと人が付いて行くわけでもないが、気候の変化、特に春の時期に、家畜の飲み水に注意する必要がある。春は牧場に草が不足する季節であり、食糧も不足するため、多くの家畜が衰弱する徴候が現れ、疾病に感染しやすい。また予測できない強い風や大雪などの自然災害に遭った場合、家畜の死亡率も高まる。こうした状況を防ぐために、家畜を河川より近くの牧場に放って、塩水を飲用させることで家畜の免疫力をつけ、寒さに耐える体力を増強していた。飲水に関しては春だけでなく、他の季節にも注意する必要がある。冬は河川や井戸の水面が凍結し、その氷を割るための道具チョラル（全長250 cmで、鉄製の部分は45 cm、穂先は28 cmである）があった。今ではチョラルの姿はもう見られない。牧畜民は家畜の生活習慣に応じて家畜の飲用水量や時間を管理していた。

当ガチャーの周辺に天然河川があることは、牧畜労働や生産に非常に好適であった。しかし、こうした簡易な再生産労働には実に大きな弱点がある。1948年から1985年まで、十数回にわたる旱魃に遭って、河川が頻繁に干上がったことで、住民の生活は困難に陥った。1990年に入って、人々は自ら庭に井戸を掘って地下水を汲み上げるようになった。ヤンジンと呼ばれている（写真7）。降



写真7 井戸

出典：2017年 筆者撮影

水量が十分な季節には河川を利用するが、普段は井戸の水で家畜に飲用水を提供する形に変わった。

GL氏は「2005年から庭に井戸を掘り電動で地下水を汲み上げて、冬は朝晩二回、夏は一回家畜に飲用水を提供している。しかし、近年の地下水位の降下が著しい」と話していた。ガチャー人によると、5年ごとに自家用飲み水としての井戸が2m～6m～25m～34mと深くなっており、畑用の井戸の深さは40mから60mまで変化しているという。そもそも旱魃地域であり、トウモロコシ用に大量の地下水が使われることによって、水源が尽きるようになってきているといってもよい。

上述したように、当ガチャーでは河川の断流や、農業灌漑により地下水の枯渇問題が起きている。さらに地下水の枯渇により住民が頻繁に井戸を掘ってしまうため、地下水の資源が破壊される一方、牧畜民と家畜と水資源との間で問題が起きるのは言うまでもない。これは牧畜業経済が持つ脆弱性によるもので、「牧畜生産の方式と習俗の形成は、特定の牧畜の群の滞在地自然環境状況から決定されている」と考えられる（江帆 2003：105）。こうした依存性は「天に頼り、過ぐす」性質を持ち、過酷な自然環境には抵抗し難い。生活環境が困難に陥れば、牧畜生産の様相は急速に変化する。

（4）家畜小屋の建設

牧場資源の減少や家畜の増加によって、牧畜業経営者は生産状況の改善に努める。例えば、生産施設の改造成業、家畜の小屋を建築する作業が取り上げられる。

家畜に飼料を与えなかった放牧時代の家畜囲いはホローと呼ばれていた。牛と駱駝は家の近くの戸外で寝る。ホローには、羊と山羊が受容される。柳条製、木製、石製など多様なバリエーションが見られる（梅棹 1991：184-186）。

当ガチャーは定住したのち、簡易な家畜囲いのホローはあったものの、多くの施設は不完全なものであり、柳条で編んだ家畜囲いや木製が多かったという。

2017年に調査に入った時は、ガチャーではすべて家畜の小屋を備えていた。モンゴル語でハシャーと呼ばれている。その中で、木、土壁で造った小屋が多く見られるが、その構造や作り方は比較的簡易なものであり（写真8、9）、立派なレンガ造りの扉や屋根が備わっている小屋を持つ牧畜民もいる（写真10、11）。家畜の多寡により面積も異なっている。

GL氏は43頭の牛を飼っており、鉄製の囲いとレンガ造りの270平方メートルの小屋を建てている。それはモンゴル族の伝統的な遊牧方式と比べると、家畜の防寒や災害に耐える役割を果たしているといえる。牧場資源の大量減少により、飼料と飲水労働、家畜の交配、繁殖活動、搾乳などの生産



写真8 粘土造りの牛のハシャー
出典：2017年 筆者撮影



写真9 木の幹と枝を利用した山羊ハシャー
出典：2017年 筆者撮影



写真10 レンガ造りの小屋
出典：2017年 筆者撮影



写真11 鉄造りのハシャー
出典：2017年 筆者撮影

活動は小屋において行われるようになった。この点から見れば、伝統的な牧畜業とは異なり、限られた空間で集中して作業を行うという目立った特徴が見られる。

また、当ガチャーの家畜小屋は一般的に住宅の東側や東南側に設置されている。そこには、人々が長期にわたって自然を利用する過程の中で培った知識や経験があった。当ガチャーは長年の強い風や大陸気団の影響を受けるため、冬が長く、日照が短い特徴を持つ。家畜の小屋を住宅の東側や東南側に設置することは頻繁に起こる北西風の襲来を避けるためであるといわれている。風雪が多い時期でも、小屋の中に十分な日が射し、適切な温度を保っていられるため、家畜の死亡率は低下する。GL氏の牛ハシャーは住宅の北側に建てている。ホルチン地域では、敷地的制約があり、増築する場合は北側に建てるのが一般的であるため、それに従って増築したとGL氏が話していた。牧草の保管所と糞を扱う所は牛小屋と隣接している。飼料の供給、糞などの排出物の掃除を効率的にするためである。

MT氏は羊の小屋を西側から、Ⅰは痩せ病気羊、Ⅱは出産する羊、Ⅲは子羊というように特別飼養を区別している。このような家畜小屋の施設の在り方は、モンゴル人の伝統的な居住風俗文化と関連があると考えられる。すなわち、モンゴル人の居住習俗のなかでは、右側が主位、真ん中が上位、左側が下位とされている。なお、古代モンゴル人の観念では、地獄は地下にあるわけではなく、むしろ東あるいは

は東北方面にあり、レネ川は「陰間」と「陽間」の境界だとされる（波 2005：32）。モンゴル語では、「東方」と「左側」を同じく一文字で表す。ブリヤートモンゴル人が使っているモンゴル語では、「東方に行く」という言葉は「死亡」という意味である。この解釈からすると、MT 氏の小屋 I に瘦せた羊や病気の羊を一番西側に定めることは、おそらく家畜の「死亡」を避けている祈願心理の表れではないかと考えられる。

社会経済の発展に従って、物質生活にも新たな変化が見える。それに比べると、文化の進歩は比較的に緩慢である。当ガチャーの家畜小屋の施設に明らかな集中化特徴が観察されるが、またその中から古代モンゴル人の伝統的な居住習俗の観念が読みとれる。人々が利益を求めると同時に、自然との協調をも提唱しているといえよう。

Ⅲ 家畜飼育と管理に関する習俗

牧畜民が牧畜業を営む最終目的は、畜産物を獲得するためにある。現代において消費者の食肉や乳製品への需要はますます高まっているため、経営者は少ない投資から最大の利益を図れるような生産運営を目指すようになった。そのため、その家畜を飼養する方式に、より高い要求が提出されている。当ガチャーの家畜飼育習俗に関して、まず家畜の構成とその変容から見ていこう。

(1) 家畜構成とその価値の変容

馬、牛、羊、山羊、駱駝はモンゴル人の「五畜」と呼ばれ、牧畜民は五畜を群れとして手元に維持することによって、その恵みを得ることができる。しかし、農耕化にさらされた内モンゴル地域では、五畜のその価値が農耕に適することと関係づけられるようになっている。また、政策による土地分配、市場経済化がその価値の位置づけを揺るがした。

ガチャー人の聞き取りに基づき、この地区に飼育されているそれぞれの家畜の特徴を表3に示した。その内容をまとめると、駱駝と山羊は旱魃に耐えるという特性を持つ。駱駝と馬は摂食量が多いという性質がある。牧草の質への要求が一番高いのは、馬で、次は牛となる。羊と山羊は主に農作物の枝や殻を餌とする。農耕への適応性からいうと、駱駝、羊、山羊は役畜としての適応性があまりない。

以下にモンゴル牧畜民が経験した変化を、それぞれの家畜ごとにまとめる。ホルチン地域においては以前から牛、羊、馬を中心とした飼育が見られる。

表3 家畜の特徴

	馬	駱駝	牛	羊	山羊
旱魃への耐性	++	++++	++	+++	++++
摂食量の多さ	++++	++++	+++	++	++
草の質への要求	++++	+	+++	++	+
農耕への適応性	++	+	+++	+	+
現金収入	+	+	+++	++	+++

注：+が多いほどその傾向が高いことを示す
出典：2017年2月の聞き取り調査より

① 馬の減少

馬は、草と水源を求めて広い範囲を移動する。草原でよく走ることから、モンゴル馬の遊牧方式が始まり、その遊牧方式のもとで、軍事用に耐える体格ができたといえよう。モンゴル語の「馬」は「旺盛、元気、運気の象徴」を意味する。そもそも馬は放牧、狩り、運輸の中で重要な位置を占め、モンゴル人の生活に重要な役割を果たしてガチャー人に愛されてきた。

しかし、近年では草原で飼養されるモンゴル馬の減少が著しい。

2018年のガチャーの馬の数はわずか65頭である。調査対象者のうち、三世帯で馬を飼っているが、頭数があまりにも少ない。GL氏は6頭の馬を飼っており、全ガチャーで一番多い頭数を持っている家庭であった。それも乗馬用ではなく現金交換のためである。1990年ごろから馬はホルチン地域では市場価格が下がり、実用性や経済価値を失った。2008年の秋、一万元の市場価格で2頭の馬を売却し、近年の価格でも1頭7千元ぐらいと話していた。2018年以降、ニュージーランドから競馬に優れた優良種が導入され、初期費用は1頭改良費が8千元程度かかるが、1頭の市場価格3万元の高価で売れていることから、ガチャーの第一人者として試し始めたという。

馬の減少の原因として、①馬はロバと比べ畑の耕作に適さないとされ、ロバは飼料が馬より少なくて済むということから、ロバがモンゴル牧畜民の家畜の中に入ってきた経緯がある。ただ80年代ごろから農耕用の機械の普及に伴い、ロバの役割もなくなったため、その数は減少した。すなわち、ロバは農耕のために入ってきたものの、農耕が進んで行く過程で消失した。それと同様に農耕用の機械が普及し、放牧時の作業にオートバイが用いられるようになり、馬の使用も少なくなった。②90年代初めから牧草地が個人に分配され、放牧地の縮小や草原の隅々にまで鉄柵を張り巡らすようになったことである。この個人所有の牧草地を守るためにできた鉄柵が、モンゴル馬の走る空間を奪うことになったのである。

上述のとおり、良質の牧草を求め広範囲を移動する馬が必要とする広い草原がなくなり、現代社会における機械化の発展に伴って牧畜民の生活における交通手段としての役割も薄れることで、馬の市場価格が下り、実用性や経済価値を失っていく中、馬は減少する運命にあったといえる。

② 「ホルチン牛」の特産化

牛は、以前からガチャー人の生産生活を支える重要な位置にあった。牛肉、牛乳の畜産物を入手し、自ら利用することを重要な目的としていた。牧畜民にとって、牛は非常に高い価値を持っている。モンゴル人の食文化の柱である赤食（肉）と白食（乳製品）において、牛は他に替わりが見出せない存在である。しかし、地方政府の経済発展方針と科学技術の進歩に従い、その家畜構成にも目立った変化が見られる。

50年代からホルチン地域では、牛の品種改良事業が初めて行われた。国内外の優良種を導入し、前後30年間の品種改良を経て80年代後期から「ホルチン牛」新品種が定められた（ホルチン左翼後旗誌編纂委員会1993）。

旗政府もホルチン牛を主とする経済発展方針を確立し、牛肉や牛乳の価格を値上げした。そのうえ、モンゴル牛を西門塔尔牛に改良することを目指して、各家庭に貸付金を配布した。したがって、広範囲に牛の飼育が広がってきた。しかし、ガチャー内では牛の品種に関して積極的な改良はされな

かった。一方、牛が急激に増加したことによって、ガチャー内では牛を中心とする家畜構成の単一化がもたらされた。その後、1990年ごろに牛乳や牛肉価格の持続的な高騰および自然環境の悪化により、ガチャー人はモンゴル牛を改良する活動を開始した。飼育投資が少なく収益が高い改良牛を選択した結果、全ガチャーではホルチン牛を飼育する牧畜業が盛んになってきた。現在もホルチン牛はホルチン地域の特産品として知られている。当ガチャーの2018年の家畜総頭数のうち、牛の割合が一番高い。牛 2017 頭、羊 662 匹、山羊 321 匹、馬 65 頭である。

③ 羊と山羊の減少

50年代に内モンゴル東部地域で羊の品種改良事業が初めて行われた。その時の品種改良は、主に羊の毛の利用のためであった。その改良に伴って、羊の毛の価格が上昇した。しかし改良された羊の肉がまずいことと、繁殖能力が低くなり、飼養する価値が減った。90年代以降に再び品種改良が行われた。それによって、羊は羊毛を産する家畜から肉を産する家畜へと変わった。

ガチャーの牧畜民は現在の羊と山羊について以下のように語っている。

「羊の肉とは家畜の肉のうち、一番栄養がある肉であり、しかも一番軟らかくて食感がいい。また、環境面からいっても、山羊と比べると行動範囲が小さく、山羊のように草の根までも食べないことを我々は知っている。しかし、経済面だけからいえば、一匹の羊は、食用にせず、羊毛だけ売るのであれば、一年で30元しかない。それに比べて、一匹の山羊は、カシミヤだけで一年で300元になる」。

GL氏は90年代からカシミヤ山羊を飼い、2005年までにおよそ200匹以上繁殖したという。実際のところ、飼養する側面からいうと、山羊は羊よりも飼養がしやすい。また、山羊は羊より乾燥にも耐性がある。しかし、GL氏が山羊を増やした一番の要因は、経済的価値にあることであろう。

ガチャーの牧畜民が山羊の環境破壊力について述べたことをまとめると、以下のようになる。

①山羊の行動範囲は広い。一日に牛の3倍走る。走ることで、口より足の方が牧草にダメージを与える。②山羊は牛と違って草の根まで食べる。③春になって、草原の草が生える時、牛は舌で草を巻きながら食べるという特徴があるため、草芽を食べることができないが、山羊は足で掘りながら食べる。④山羊は樹皮まで食べる。

その環境破壊力を理解していても、カシミヤの誘拐に負けて本格的に経済的価値だけを優先する人間が多くなってしまったといえる。市場経済化はその社会の環境に適応しようとする意識を弱め、逆に市場に応じる現金意識を促進するため、その地域の更なる環境破壊を助長する恐れがあると考えられる。

梅原猛は、「西の文明は小麦農業と牧畜が生産の基本で、森を切って畑にした。畑が荒れると牛や山羊を飼い、更に荒地でも放牧できる山羊を飼う。最後に山羊が木の株を食べて全部枯れてしまい、砂漠になる」と述べている（梅原 2002）。

2003年から、その激しい環境破壊力を認識した政府は、牛の放牧を推奨し、山羊の放牧を規制しようとしたという。牛、羊は三カ月か、六カ月間の「休牧」、山羊と馬は六カ月か、通年の「禁牧」という政策が実施された。

その後GL氏は「長い時間畜舎に閉じ込められた山羊の体力が、放牧する山羊より弱くなり、羊肉

もまづくなる。また農耕もするし、山羊の畜舎飼養にも労働力が要るし、「休牧」に違反して、こっそりと夜間に放牧を時々していたが、心身ともに疲れるから、2008年山羊と羊を完売した。今は牛だけ飼っている」と話していた。

「休牧」により、山羊が放牧できなくなり、飼う人も減少した。

要するに、家畜の構成は牛、羊、山羊、馬の多様な形態から牛を主とした飼養単一化の形態へと転換しつつある。生態環境の変化や地方経済政策の実施が、当ガチャーの家畜形態を単一化させていく重要な要因だといえる。

④ 豚と鶏の飼養

内モンゴルのモンゴル人は、農作を行って定住化することによって、伝統的な草原五畜以外に豚を飼うようになった。調査ガチャーで家畜の中心となるのは、牛と羊であり、それ以外に豚と鶏などが飼育されている。豚や鶏を飼うようになって80年ぐらい経つという。一戸で1〜2匹の豚を飼育している農家は自給用に、豚を3匹以上飼育している農家は自給用以外に販売目的のことである。

MT氏は7匹の豚を飼っており、雌豚1匹、雄豚4匹、肉用として肥育されているのは2匹である。MT氏は、「毎日3回餌を提供する。餌は、主にトウモロコシ、大豆、緑豆など農作物の茎を使っている。子供の豚には離乳してから一カ月ぐらいで市場から購入した人工飼料を提供する。畜舎に閉じて飼養するが、夏は外に出す時もある。子供を生んだ雌豚は大体40日後にまた発情期に入る。交配させてから子供が生まれるまで115日かかる。夜に生まれることが一般的で、生まれてから一週間の間に子供の豚が雌豚に押されて死ぬことを注意する必要がある。20日〜40日間前後で離乳したら売ることができる。春は子豚を買いに来る親戚やガチャー人が多いので一匹で300元になる。最近成熟した豚を1600円で近くの鎮の市場に売った。毎年秋とお正月の前に食用豚を屠って食べる」という。ここで注目されるのは、モンゴル人の伝統的な食品に含まれるはずのない豚肉の普及はこのホルチン地区の食生活の一つの特徴になるということである。

鶏については、卵と肉を自給するために、数羽から30羽程度を飼育している農家が大部分である。干し草やトウモロコシの種が餌とされる。夏になると、飛蝗（バッタ）も多くなるためそれも餌になるという。中国では「土鸡蛋」という農牧村産の卵が人気であり、内モンゴルでは草原興発会社は、草の種や昆虫で飼育された鶏肉をブランド商品として市場に出している。一部の農家は卵や肉を販売しており、このように商業的な養鶏経営を行うことで市場経済化や国の産業化に取り込んでいるといえる。

(2) 家畜の保護管理習俗

牧畜民は長期間の牧畜生産の中で、自然被害の予防法と家畜疾病防疫対策をまとめた。しかし、科学技術の発展に従って彼らの家畜保護習俗にも目立った変容が見られる。これに関して、主に当ガチャーの害虫駆除「バタガン・フーフ」、灰撒布「ウニス・チェチェホ」、眼病治療「挑箍眼」、家畜標識「イム・タムガ」を述べる。

① 害虫駆除「バタガン・フーフ」

「バタガン・フーフ」とはモンゴル語（当地の言葉）で蚊・蠅をバタガンといい、フーフとは追い払うの意味である。当ガチャーでは漢語で「打蚊蠅」という人もいる。

家畜の糞、ハエを追う効果のある植物を燃やすことで、蚊、虫やハエを追い払うことを指す。

この方法は、夏の夕方6時～7時ころに行われるが、その主要な材料は干した牛の糞、艾葉（ヨモギ）とその他の野生植物である。



写真 12 バタガン・フーフ

「バタガン・フーフ」は以下のような手順で行われている。

まず場所を選択する。場所は当日の風向をみて、家畜群を風下に集める。次に材料を燃やすとその煙が風の力で家畜の群れの方向に流れ、蚊とハエなどが防除できる。用意した牛の乾燥糞と植物を円形に設置して火をつけるが、「バタガン・フーフ」に使用する植物に水分が含まれるので、牛の糞が燃える時間が延び、煙が多く出る。また糞の量、家畜群や蚊とハエの多寡によって決められる。一般的に直径が 50 cm 程度で、高さが 25 cm 程度であれば、6 時間ほど燃え続ける。

② 灰撒布「ウニス・チェチェホ」

「ウニス・チェチェホ」はモンゴル語で、ウニスは灰、チェチェホは散布の意味である。ここで用いる灰は、牛の糞、葦（アシ）、農作物の幹が燃焼した後の灰のことを指す。

朝食の前、主婦たちは竈に残った灰を取って庭に晒しておくが、高温のため火事で家畜を火傷させないように注意が必要である。朝食後、家畜の小屋を掃除し、糞などを片付けてから晒した灰を小屋にまいておくことを「ウニス・チェチェホ」という。

「ウニス・チェチェホ」を行う時は小屋の各角、特に家畜がよく立ったり歩いたりするところに灰を数回まくことで、小屋の清潔さや乾燥が保たれる。灰の性質は乾燥していることで、高温で処理すると殺菌および除湿の効果があるため、当ガチャーでは子供の家畜の保護に灰は重要な役割を果たしている。

③ 眼病治療「挑箍眼」

これは、家畜の眼から「箍眼」（黒色、黄色の眼膜）を取る治療方法である。この治療を行うことにいくつかの手順がある。まず、家畜の体質、動作、糞から異変を観察できる。例えば舌の腫れ、腹が張るなどの状況が現れる。もし家畜の眼内に、黒色もしくは黄色の眼膜ができたら、家畜には食べない、飲まない、反芻しない現象が現れる。それは、体内に「箍眼」ができている可能性があるからである。次に、消毒したハサミで家畜のしっぽを切ってから白糸の針で「箍眼」を刺し通した後、しっぽと眼のまわりを塩で消毒する。「挑箍眼」を実行する時には、会話が禁止されており、もし、よだれが家畜の眼に入ったら悪兆とされ、家畜の疾患が繰り返され死亡に及ぶといわれている。使用する糸は必ず白色であり、それは健康、純潔を象徴している。白色であるからこそ家畜体内の感染を綺

麗に処理できるといってもよい。

科学技術の発展に従って、当ガチャーの家畜に対する保護習俗は画期的に変容している。1952年に始めて後旗で獣医技術が導入され、民間の獣医学と西洋医学が両立する期間があった。1976年に、政府は獣医実験室と設備を設立し、西洋獣医の育成に力を注いだ。1985年以来、政府はさらに防疫施設に力を入れ、先端技術を導入すると同時に西洋獣医の組織を拡大し、一方で民間獣医の行動を監督していた。また、テレビニュースや雑誌など現代情報手段の普及により、ガチャー人の科学文化に対する意識も高まった。

予備薬品は大きな災害や患者の抵抗力が足りない場合では対処が困難であるが、早く病状を抑える点ではガチャー人の負担を軽くしたといえる。家畜保護方法に現代医薬技術が導入されたことで、当ガチャーの牧畜業の近代化および科学技術は、村落社会の中で順調に機能している。

④ 家畜標識「イム・タムガ」

モンゴル人は家畜をほかの家庭と区別するために、所有家畜には印をつける家畜管理習俗がある。

特に馬、牛、駱駝には焼印を押す。焼印は鉄製でモンゴル語でタムガという。タムガには家庭によって形はさまざまである。図4に示したのは、トールン（桃の）タムガと呼ばれるもので、印が桃の形をしている。下に線状のものがついているので、ダブハル（重なり）タムガとも呼ばれる。全長56 cm、印の部分は6×10 cm（梅棹 1991：191）。

ダランアイル・ガチャー人の話によると、かつてはタムガを春と秋に行っていた。焼印を押すところの毛をハサミで切るか水で濡らしてから火で焼いたタムガをバランスよく押す。タムガを押す位置にも決まりがある。駱駝は顔かものところに押し、馬は顔には押さず、後肢の左脇に押し、牛には押さない。牛の角に押す場合があったという。家畜の単一化や頭数の減少により、現在は当ガチャーではタムガを押す習慣はなくなった。タムガも見当たらなかった。



図4 タムガ
出典：梅棹（1991）より



図5 イム
出典：梅棹（1991）より

羊と山羊には焼印をせず、耳印イムを施す（図5）。片耳か両耳のところにハサミを入れて印をつける習俗である。現在も羊と山羊の減少や畜舎飼養により区別する必要もなくなり、耳印もほとんど施されていない。

ところが羊、山羊の後肢あるいは角にペンキを塗る標識習慣が見られる（写真13、14、15）。塗るところの毛を切るかそのまま塗るか、ペンキの色、色の組み合わせ、塗る位置を決める時、できるだけほかの家と異なることを意識しているように見える。青色、赤色、黄色がよく使われている。これをモンゴル語で「テムディグ」と呼ぶ。



写真 13 羊のテムディグ
出典：2017 年 筆者撮影



写真 14 羊のテムディグ
出典：2017 年 筆者撮影

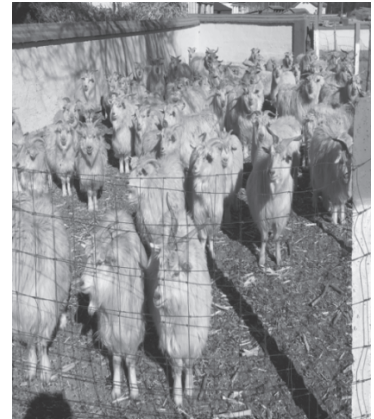


写真 15 山羊のテムディグ
出典：2017 年 筆者撮影

(3) 家畜に関する処理習俗

家畜の処理法に、屠畜と販売の二種類がある。自給自足の牧畜経済の崩壊により、当ガチャーの家畜処理方式は屠畜から販売方法に転換してきた。

肉製品はモンゴル人の生活には欠かせない食品であり、新年や祭日、客をもてなす重要な料理であり、日常の肉食生活は牛と羊を中心とした屠畜によるものであった。

屠畜を行う際に、①ナイフで家畜の心臓部附近を切り裂いた後、裂け目に沿って体内の動脈を切る。②指で動脈の切れ目を押さえて、血液を家畜の体内に残すようにする。

次に、モンゴル人の伝統的な肢体分裂法により、家畜の皮を剥ぐことから始める。

これは足裏から剥き始めるのであるが、それは剥がされた皮の上に家畜の肉体を置くためである。そして、前足を取り、腹を切って内臓を取る。続いて、ナイフで家畜の胸と腹が繋がったところに穴を開け、家畜の足の裏をそこに入れて体内に残った血液を片付け、さらに足の裏を切り取って血を綺麗に処理する。次に、家畜の脊椎の部分解体し、顎に沿って頭を切り取る。最後に上下の顎を分けて口内の雑物を掃除して仕上げる。

モンゴル人の伝統的な屠畜儀礼では、血液が体外に流れることを禁止している。その理由は血は生物の魂であり、血液を残すことは家畜の魂を保つこととされる。肉体が損傷されても血液が体内に残っていれば、生まれ変わるが、逆に血液が体内から流出すると肉体と魂は引き離されてしまい、生まれ変わることができないといわれる。血は体力の増加や生命を維持させるもので、生命の精華であり、魂が留まる場所である。

一方、上述したように、家畜は重要な生活原料である以外に、取り引きできる商品としての価値商品を果たしている機能を有している。建国前、情報収集や交通上の不便さで漢人の仲買人によって生活必要品の取引を行う時代があった。1983 年、近隣の村では「供銷合作社」が成立したため、当ガチャーの商品経済の発展が促進された。したがって、「供銷合作社」は畜産品と家畜の取引の協商性と公平性を維持する重要な方式の一つになった。1990 年ごろには、中国の「改革」進展と養牛業の発展を重視する地方経済方針の実施により、ガチャーの家畜構成が変化し、人の商売意識も極めて増強した。彼らは畜産品の取引により生計を立てるだけでなく、養牛業を発展させることに注目し、子供の家畜と乳製品の販売によって経済利益を上げ、生活の収入問題を解決するようになった。このよ

うな商品経済の発展に従って、貯蓄意識が高まり、現物より紙幣に自信をつけるようになった。さらに、2000年からガチャーでは、モンゴル人の仲買人が現れ、畜産品の取引を行い、モンゴルガチャーと周辺の漢人村との間の家畜商売に影響を与えた。2017年まで当ガチャーでは三人のモンゴル人の仲買人が家畜の取引業を通して一万元の年収を獲得していた。

要するに、牧畜民の現金意識の高まりにより、家畜処理方法が屠畜習俗から商売を重視する商品経済の方式に変わってきた。また、人の飲食習俗の変遷および家畜頭数の減少により家畜の屠畜数が減少しつつある。さらに、牧場資源の減少と地方政府の牧畜業発展政策の実施は当ガチャーに家畜構成の変化をもたらした。牛を重視し、牛の販売による経済利益を求める商品経済様式が、家畜の中の子供を大量に販売する商品経済の発展を促進している。さらに、当ガチャーではモンゴル人の伝統的な屠畜習俗が伝承される一方、モンゴル人の仲買人が存在することは、牧畜業の生産習俗の独特性を反映している重要な要素だと思われる。

IV 牧畜具の機能およびその意義

牧畜具は牧畜業生産には不可欠なものである。それは労働者の体の負担を軽減するうえ、労働効率を高める効果があり、牧畜業生産の経験や知識を伝承する役割を果たしている。

(1) 牧畜具と用途

半農半牧村落であるダランアイル・ガチャーでは、ウルガ（馬とり竿の意味、漢語で套馬竿という）、焼き鋤（コテ）、鎌など若干古いものがなくなった以外、伝統的な鞍「エメール」、手網「ノクト」、はみ「ハジャール」、鞭「タショール」、足かせ「チュドル」、汗とり「ホソール」、ハサミ「ハイチ」、櫛「サム」などがあった。

調査地の牧畜経営用道具を品名と用途によって、以下の表にまとめてみた。

表4 牧畜経営用道具一覧

番号	具名		対象	用途
	モンゴル語	日本語		
①	「エメール」	鞍	馬	馬乗用
②	「ノクト」	手網	馬	馬制御用
	「ハジャール」	はみ	馬	馬制御用
③	「タショール」	鞭	馬	馬乗り手が打つ、家畜の群れを追う
④	「チュドル」	足かせ	馬	馬乗用の足かせ用
⑤	「ホソール」	汗とり	馬	馬の全身の汗をこそげ落とす
⑥	「ハイチ」	ハサミ	羊、山羊、馬	羊の毛、山羊長い剛毛、馬のたてがみを刈る
⑦	「サム」	櫛	山羊	山羊の毛は和毛をむしり取る
⑧	「アルガ」	カゴ	牛	牛糞拾い
	「サバル」	熊手	牛	牛糞拾い
⑨	「オンゴチャ」	桶	羊、山羊、牛、馬	水と飼料を与える道具

出典：2018年2月の聞き取り調査より

① 鞍「エメール」

エメールの本体は木製であるが、革およびフェルトを用いて複雑な構造になっている。各部位の名称も細かく分かれている（図 6、図 7、写真 16、17、18）。

モンゴル鞍の特徴として、腹帯が前後に二本ある。それぞれ左右に分かれている。馬の左脇になるほうは留め金がついていて、右脇のほうは穴があけてある。前者はオロンと呼ばれ、後者はジウムと呼ばれる。また、前者のうち留め金の部分はゴリクという。この腹帯をしっかりとめておかないと、鞍がぐらついて落馬する。

鐙は、ドローと呼ばれる。鉄製で、鐙の長さは左右非相称で、左が短く、右が長い。鞍のうえでは、左足を曲げて右足をつっぱり、右の尻に体重をかけ、上半身は斜め右に傾いている。左手に手綱を持ち、右手に鞭を持つ。

鞍には、ガンジャガと呼ばれる革ひもが前後左右の四カ所についている。これは旅行の時に携帯品を結びつけるのに用いる。

オボ祭りでは競馬が行われる際の騎手は少年たちであって、この場合はすべて鞍なしの裸馬である。

② 手綱「ノクト」と、はみ「ハジャール」

馬の顔面には、革ひも製の手綱「ノクト」と制御用のはみ「ハジャール」を装着する（図 8、9、写真 19、20）。ノクトの部分名称として、耳の後ろの部分がシル（うなじの意味）、鼻の部分はハマル（鼻の意味）と呼ばれる。ノクトの革ひもは馬の口の左側から一本あり、ハジャールの革ひもは馬の口の両脇から出て二本あり（一本がループ状態に）、合計三本を左手で握ることになる。

③ 鞭「タショール」

鞭はタショールという（図 10）。木製の柄に革ひもがついている。その革ひもの先は輪になっており、その部分に長い革ひもをつぎ足すことができる。乗馬の場合は通常短いほうを使う。馬に乗ったのまま家畜の群れを追う時に、革ひもを長くするという。柄を握る部分には、手を通すように革ひもの輪がついている。

④ 足かせ「チュドル」

戸外で小休止する時に、しばらく馬を放牧するが、遠くへ行ってしまうないように、足かせをはめる（図 11）。モンゴル語でチュドルというが、ホルチン方言では、シュドルといっている。チュドルは革ひも製で、前肢二本と後肢の左側一本を縛る。こうしておけば、馬は走ることができない。前二本の部分は、ハと呼ばれ、後ろ一本はソムと呼ばれる。足をはめる輪の部分をアラクと呼び、フック式で止める。止めるための木片のついたほうをジフタ、輪をグフと呼ぶ。

⑤ 汗とり「ホソール」

乗用の馬はよく手入れされる。労働のあと、馬の全身の汗をこそぎ落とすための竹ベラがあり（図 12）、ホソールという。馬にのみ用いる。ギザギザの切れ目がついている櫛の側とついていない背の側がある。汗を大量にかいている時は、背を用い、汗をあまりにかいていない時は櫛のほうを用いる。

このほか、馬の尾の毛で作ったブラシが使われることもある。柄はニレ材で、シュワースやトージョーと呼ぶ。いずれも漢語の発音のまま呼ばれている。ヘラとブラシをセットにしているものもある。

⑥ ハサミ「ハイチ」

羊の毛は6月ごろに刈る。ハサミはハイチと呼ばれる。山羊、駱駝の毛や馬のたてがみもこのハサミで刈る（図13、写真25）。

⑦ 櫛「サム」

山羊の毛は、長い剛毛をハサミで切るが、和毛は、サム（櫛の意味）と呼ばれる小型の熊手のような鉄製の道具でむしり取る（図14、写真25）。

⑧ 牛糞拾い「アルガ」、「サバル」

家畜糞をアルガルという。アルガルを集めるために女たちは背に柳の枝で編んだカゴを背負い、熊手を持ってでかける。カゴはアルガといい、熊手はサバルと呼ぶ（写真26）。牛糞の完全に乾いたものを選んで、熊手ですくい取り、背中のカゴに肩越しに上手に投げ入れる。このような伝統的なカゴ以外、鉄製の輪がついている台車も見られる（写真27）。拾い集めてきたアルガルは、木で囲って積み上げる。その施設はアルガリンオボーと呼ばれる。その牛糞を燃料として使う場合、運んで持ちやすいハンドルのついているカゴが使われる。それもアルガあるいはサガスと呼ばれている（写真28）。

⑨ 桶「オンゴチャ」

梅棹忠夫は1944年9月から1945年2月までの内モンゴルにおけるモンゴル牧畜調査で、家畜に水をやる桶をオンゴチャと呼んでいると指摘した。また、井戸は共有の財産と論じていた。そして、（図15）のように、丸太をくりぬいたものは、外径35×150 cm、内径22×110 cmであり、板を組み合わせ鉄製のタガをはめたものがあると述べている（梅棹1991：592）。

しかし、現在内モンゴルにおいて、井戸はほぼ個人所有のものとなっているために、オンゴチャも共有から私有になっている。その上、モンゴル人の利用しているオンゴチャは、木製だけに留まらず、鉄製、レンガ・コンクリート製、ゴム製、石製などの多様なもので作るようになり、形も（写真29～33）に示したように多様になった。そのために、オンゴチャの前に何々用のオンゴチャと説明をつけて区別する。たとえば、家畜に水をやるオンゴチャを「水のオンゴチャ」といい、牛に飼料を与えるオンゴチャを「牛のオンゴチャ」というように区別する。現在、内モンゴルでは家畜に水を与えるものに比べ、飼料を与えるオンゴチャが圧倒的に多く使われている。その理由はホルチン地区のモンゴル人が定住し、家畜の飼育方法が放牧専業から放牧と舎飼いの融合形態に変わったこと、作物飼料の割合の増加、牧草地の減少、砂漠化などの自然・社会環境の変化などが挙げられる。

(2) 牧畜具に見られる地域性

以上の9点がダランアイル・ガチャーの牧畜具のすべてである。すべて人力で使う手動具であっ

て、今でもほぼ保存され実際に使われている。近年、科学技術が発展している中で、小型トラックや粉砕機が生産業の振興に必要なものとして導入・使用されているが、伝統的な工具を手放したことはない。当ガチャーはモンゴル人を主体とした村落である。牧畜具の継承と牧畜具が民族特色を保つ要因になったのは当ガチャーの民族構成と関連があるろう。

①から⑤までは馬に用いる具であり、残りの4点がそれぞれ羊、山羊、牛に用いる。馬、羊、山羊の数の減少により、使用する頻度も大変低くなってきた。当ガチャーでは馬に用いる道具を持たない家が大半を占める。改革開放以来、農業化と機械化によって、ホルチン左翼後旗の馬具制作工場は潰れつつあり、腕のいい職人もごくわずかとなっている。また、この工芸を習得する若者たちも少ないため、使用されてきた手作り民具が危機に瀕しているといえる。伝統的な馬具制作技能の継承やそれに関わる馬文化も喪失しつつあるであろう。

また当ガチャーの牧畜具には目立った地域性がある。人間は生産の振興を目指すために、現実の生産状況に相応しい工具を作り出さなければならない。そのため、同様の工具でも地域環境や使用集団の差異によって変異が見られる。モンゴル族は極めて困難な環境の中で牧畜生産労働を行うため、頑丈で変形しにくく長期間使えるものが求められる。当ガチャーでは、鉄、木材を原料にした牧畜具が比較的多い。彼らは牧畜具を制作する時、長持ちできるかどうかを考える以外に、また材料の出典も吟味する。一般的には、木材の牧畜具の材料は主に周辺の森林から採っている。その中で、ニレ、柳、ポプラが牧畜具に適した木材であり、それを使って飲み水用の槽、鎌の柄、籠、鞭の棒などを作っている。家畜に水をやるためのオンゴチャは、かつては丸太をくりぬいたものや板を組み合わせて鉄製のタガをはめたものが使われていたが、現在は鉄製のものが一般的である。彼らは長期にわたり生産を継続させてきたことで生存環境に慣れ、伝統文化を継承すると同時に、資源を適切に利用している。

次に、このような牧畜具はガチャー人の社会的地位および家庭の経済状況を示す指標となる。ダランアイル・ガチャーでは、牧畜具が揃っている家庭は生活環境が充実している家庭といえる。逆に牧畜具を借りてレンタルしている家庭は怠惰で、貧困な家庭である。さらに、牧畜具を持っているかどうかで、どの家庭が牧畜業を営んでいるかが分かる。

さらに、ガチャー人たちは牧畜具に特別な感情があり、片付けや使用の際に従うべき規定がある。例えば、成人女性は縄と刃の上を渡ってはいけない。モンゴル族の習俗概念では、成人女性は不浄とみなされ、家畜に災害を及ぼすと考えられている。過去には、牧畜具の一年間の労働をねぎらい、また来年の生産が順調に続くように、毎年春節に牧畜具に馬乳酒やバターを供えて、赤い布を結ぶ習俗があった。さらに、家の牧畜具に名前を付ける人もあり、工具にも持ち主と同様、性質や感情があると考えていた。それ以外に、牧畜具を貸し出す時に、いつも家の工具を褒める習慣がある。それは、牧畜具を非常に重視していることを表す一方、借りる相手に慎重に使用して欲しいことを示していると考えられる。このような牧畜具に対する使用習俗は、本来の使用価値を超え、それに対してガチャー人が感情を込める依頼物であるということを示すと同時に、牧畜文化を反映する現象の一つと考えられる。

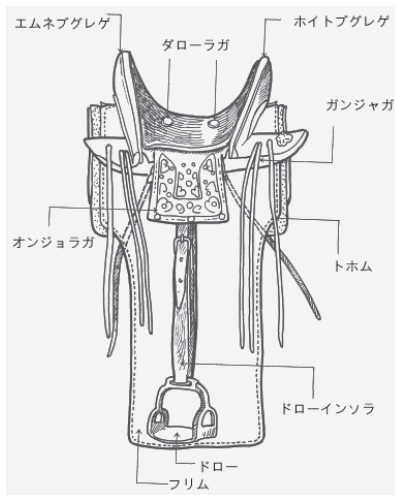


図6 エメール各部位の名称
出典：梅棹（1991）に加筆

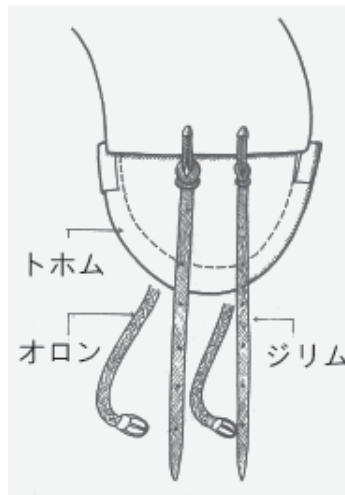


図7 エメールの腹帯
出典：梅棹（1991）に加筆



写真16 エメール
出典：2017年 筆者撮影



写真17 エメール
出典：2017年 筆者撮影



写真18 調査地の馬具職人がエメールを作る
出典：2017年 筆者撮影

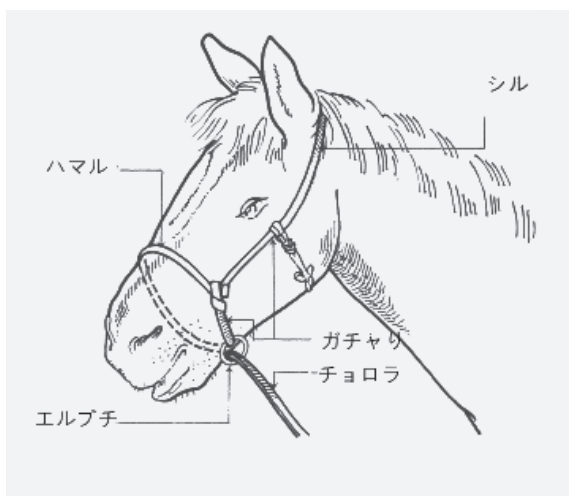


図8 ノクトの部分名称
出典：梅棹（1991）に加筆

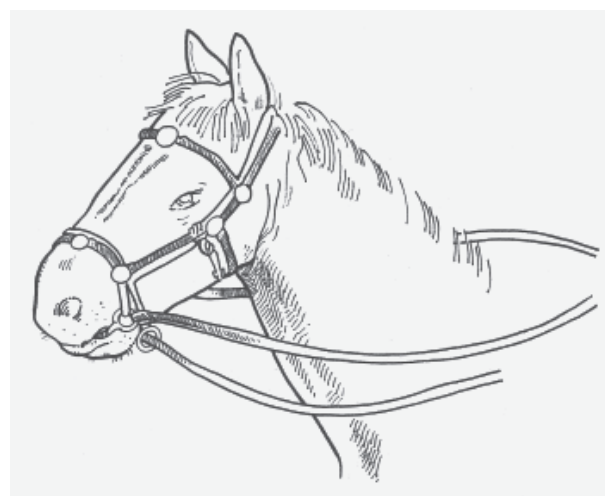


図9 ハジャール
出典：梅棹（1991）より

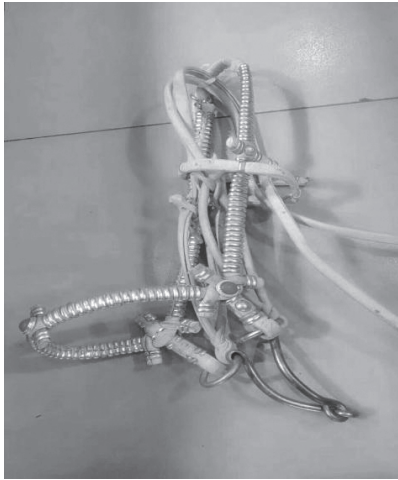


写真 19 ノクト、ハジャール
出典：2017 年 筆者撮影



写真 20 ノクト、ハジャール
出典：2017 年 筆者撮影



写真 21 乗馬用エメール、ノクト、
ハジャール
出典：2017 年 筆者撮影

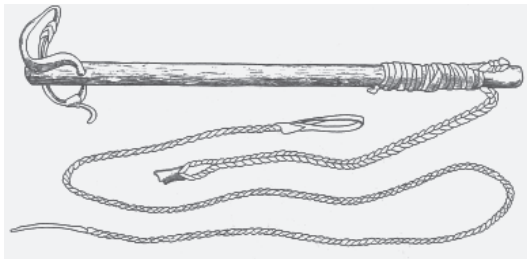


図 10 タシヨール
出典：梅棹（1991）より

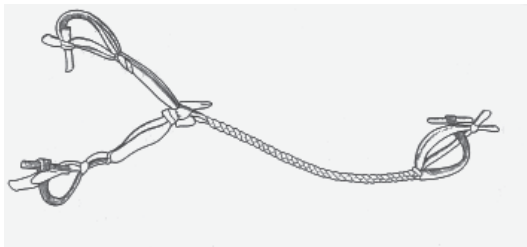


図 11 チュドル
出典：梅棹（1991）より

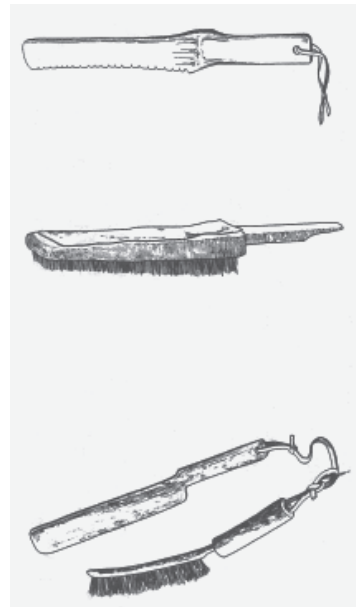


図 12 ホソール、シュワース
出典：梅棹（1991）より



写真 22 乗馬用タシヨール
出典：2017 年 筆者撮影

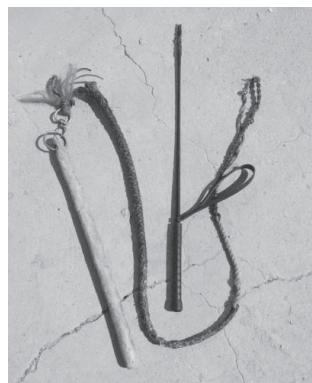


写真 23 タシヨール
出典：2017 年 筆者撮影

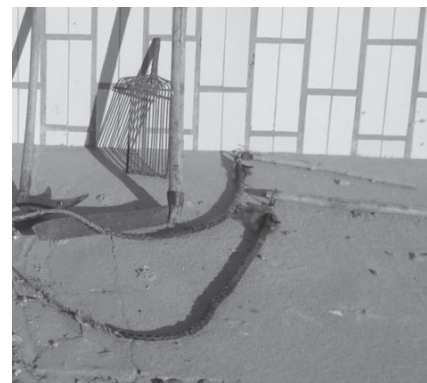


写真 24 家畜を追う時に使うタシヨール
出典：2017 年 筆者撮影

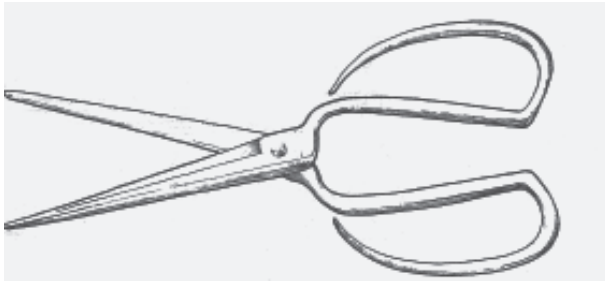


図 13 ハイチ
出典：梅棹（1991）より

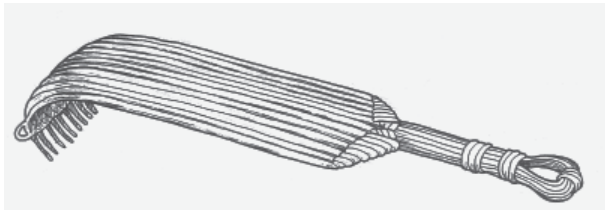


図 14 サム
出典：梅棹（1991）より



写真 25 ハイチ、サム
出典：2017 年 筆者撮影



写真 26 アルガ、サバル
出典：2017 年 筆者撮影



写真 27 牛糞拾い
出典：2017 年 筆者撮影



写真 28 サガス
出典：2017 年 筆者撮影

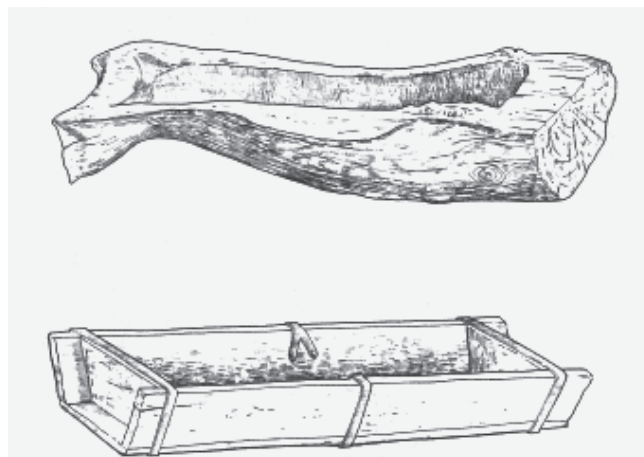


図 15 木製のオンゴチャ
出典：梅棹（1991）より



写真 29 鉄製の飼料用オンゴチャ
出典：2017 年 筆者撮影



写真 30 コンクリート製の飼料用オンゴチャ
出典：2017 年 筆者撮影



写真 31 鉄製飲み水用オンゴチャ
出典：2017 年 筆者撮影



写真 32 鉄製飲み水用オンゴチャ
出典：2017 年 筆者撮影



写真 33 タイルを入れた飼料用オンゴチャ
出典：2017 年 筆者撮影

おわりに

本論は、内モンゴルにおけるホルチン半農半牧地区の牧畜業の生産習俗の現状と変容をダランアイル・ガチャーの事例から考察したものである。その特徴を以下のようにまとめることができる。

- (1) 生存環境における農業化、近代化、政策などのさまざまな要因によって、牧畜業の生産習俗には、秋冬の日帰りの放牧と春夏の「畜舎飼育」を融合した飼育方式の形成が見られる。
- (2) 家畜構成の単一化へ変化しつつあり、家畜と畜産品の商品化などの特徴が見られる。

かつてのモンゴル人が「五畜」を飼育したのは、乳、肉、皮などの畜産物を獲得し、基本的な生活を維持するためであった。つまり、家畜には生産原料の価値があるとともに、生活の原料価値もある。ダランアイル・ガチャーの牧畜業の発展史から見れば、家畜構成は牛、羊、山羊、馬の構成からホルチン牛を主とした単一化の飼育方式に変わってきている。特に、ホルチン牛の品種改良の成功により、自ら家畜の構成を調整し始め、徐々にガチャー全体で改良牛を飼育するようになったが、「休牧」政策により、家畜構成の単一化を促進した。

- (3) 村人の牧畜業を経営する意識にも変化が現れた。ホルチン牛を重視するようになるに従って、家畜の中の雄の数を抑える方法を採用するようになり、子供の数を増やすことで現金交換を目指すようになった。以前は、遊牧経済の中で、雄と子供の家畜は基本的な物質生活を支えるものであった。それに比べると、現在のダランアイル・ガチャーでは、子供の家畜は直接経済純益を作り出す商品になっている。牛乳を搾る生産労働は過去の主婦の仕事であり、重要な生活原料であったが、生態悪化により搾乳を行わないようになってきた。すなわち、家畜の「生産原料と生活原料」となる二重性が、家畜の商品化に従って交換価値を増している。

- (4) モンゴル人を主体とした村落の牧畜具の継承と、牧畜具が民族の特色をある程度保っている。しかし、耕地の増加や放牧禁止に伴い、専業農家は増えつつあり、牧畜を専業として経営する牧畜民はもはや存在しないことからみると、ホルチン地区は表面上、半農半牧地区に分類されていても、農主牧従へと傾斜し、さらに純農業経済に陥ってしまう恐れがある。それに従って、牧畜具や牧畜生産に関する習俗の伝承も困難となるであろう。

注

- (1) ガチャー、ソム、ホショー（旗）、アイマク（盟）はモンゴル語であり、内モンゴル自治区牧畜地域で用いている行政単位で、それぞれ中国の行政の村・郷・県・市に相当する。
- (2) 土地の面積単位で、1ムーは666.7平方メートルにあたる。
- (3) 「退耕還林」とは、土地を耕すことを止め、その土地を森林に戻すことを意味する。
- (4) 「退牧還草」とは、家畜を自然に放牧することを止め、放牧地を草原に戻すことを意味する。

参考文献

日本語文献

- 市川光雄 1997 「環境をめぐる生業経済と市場経済」青木保ほか編『岩波講座 文化人類学2 環境の人類誌』、133-161、東京：岩波書店

- 梅棹忠夫 1991 『回想のモンゴル』東京：中央公論社
- 梅原猛 2002 『梅原猛の授業 仏教』東京：朝日新聞社
- 兄王香菜子 2012 『「脱社会主義政策」と「砂漠化」状況における内モンゴル牧畜民の現代的変容——オールドス地域農耕民とゴビ地域遊牧民の事例——』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究会
- 小長谷有紀 1996 『モンゴル草原の生活世界』東京：朝日新聞社
- 小長谷有紀 2001 「定住化過程におけるモンゴル族の牧畜経営」佐々木信彰編『現代中国の民族と経済』、185-207、東京：世界思想社
- 澤田裕之 2004 「中国内蒙古北東部ホルチン（科爾沁）沙地における農牧業の変化」『地球環境研究』、61-70、立正大学地球環境科学部
- 暁剛、池上彰英 2015 「近現代における内モンゴル東部地域の農業変遷——遊牧による牧畜業から定住放牧と耕種農業に至る過程——」『明治大学農学部研究報告』64（3）、67-86、明治大学農学部
- 巴圖 2006 「内モンゴルにおける牧畜経営と耕種農業」『横浜国際社会科学研究』11（3）、369-391、横浜国立大学国際社会学学会
- ボルジギン・ブレンサイン 2001 「定住——村落形成と内モンゴルにおける沙漠化——ホルチン地域を事例に——」『沙漠研究：日本沙漠学会誌』11（1）、13-22、日本沙漠学会
- ボルジギン・ブレンサイン 2003 『近現代におけるモンゴル族農耕村落社会の形成』東京：風間書房
- ボルジギン・ブレンサイン 2007 「ハラチン・トメド移民と近現代モンゴル社会——モンゴルジンのハイラド氏を事例に——」モンゴル研究所編『近現代東部変容』、318-345、東京：雄山閣
- 楊海英 1991 「家畜と土地をめぐるモンゴル族と漢族の関係——オールドスの事例から——」『民族学研究』55（4）、455-468
- 吉田順一 2007 「近現代内モンゴル東部とその地域文化」モンゴル研究所編『近現代内モンゴル東部の変容』、272-294、東京：雄山閣

漢語文献

- 包智明、郝亚明 2010 『体制政策与蒙古族乡村社会变迁』中央民族大学出版社
- 波少布 2005 『蒙古风情』香港天马图书有限公司
- 江帆 2003 『生态民俗学』黑龙江人民出版社
- 科爾沁左翼編纂委員会主编 1993 『科爾沁左翼后旗志』内蒙古人民出版社
- 科爾沁左翼編纂委員会主编 2008 『科爾沁左翼后旗志』内蒙古人民出版社
- 内蒙古自治区统计局编 2005 『内蒙古统计年鉴』中国统计出版社
- 内蒙古自治区统计局编 2003 『2000年人口普查中国民族人口资料』中国民族出版社
- 通辽市统计局编 2004 『通辽市统计年鉴 2004』中国民族出版社
- 色音 1998 『内蒙古游牧社会变迁』内蒙古人民出版社
- 刘冰、龚维 2008 「科爾沁沙地再起绿色风云」中国绿色时报 10月16日报道 中国林业网
URL：<http://www.forestry.gov.cn/portal/main/s/102/content-247971.html>
- 中国畜牧业协会信息中心 URL：<http://www.yz88.cn2009/08/21>

モンゴル語文献

- フルルシャ 2003 『ホルチン風俗文化研究』内蒙古教育出版社
- ボルジギンアギナル・ジルガラ 2007 『遊牧文明史論』内蒙古文化出版社